

## ●グローバル化時代の医療・検査事情

元・大使館付医務官の独り言  
第三話「ブルガリアで“毒を以て毒を制す”を見る」の巻よし だ さだ のぶ  
吉 田 定 信  
Sadanobu YOSHIDA

「また出ましたよ……」と領事が溜め息交じりに医務室へやってくる。ブルガリア<sup>1,2)</sup> 在勤中はこの繰り返しだった。1995年11月、ほぼ3年間のナイジェリア勤務を終え、筆者は次の任地ブルガリアの首都ソフィアへ転勤した。ナイジェリアに赴任する前、人事課からは「2年もてば御の字だ」とか、「1年半でもかわいそうだ」とか怖い話ばかりを聞かされて赴任したが、3年間の任務を全うできたのは、現地の医療関係者に助けられたことに加えて、同僚職員やその家族、在留邦人らと仲よく過ごすことができたことが大きかった。困難な地で暮らすということは、われわれ日本人が互いに協力し合いながら運命共同体として暮らすということであり、決して呉越同舟であってはならない。ナイジェリアを発つ日、職員だけではなく、多くの在留邦人も集まってくれた。これほど盛大な見送りは、後にも先にもナ

イジェリアだけだった(写真1)。こうして灼熱のアフリカから極寒の東欧へと向かったのである。

さて、冒頭の領事の溜め息に話を戻そう。今では大相撲の幕内でブルガリア出身力士が活躍したり、海外情報番組を観るとソフィアに地下鉄が開業したりと、隔世の感がある。しかし筆者が転任した当時のソフィアは、歩いても路面電車に乗っても襲われるような物騒な町だった。すなわち、東欧諸国の政変を経て1990年に共産党の一党支配の終焉を迎えてからわずか5年という時期であり、若者の価値観には自由と放縦が入り乱れ、治安が悪化していた。筆者自身、ブルガリア語で絶叫しながら走り寄ってくるスキンヘッドから一目散に走って逃げた経験もある。なぜ怒られるのだろうかと思いつつも、とにかく逃げた。

現在の日本大使館のホームページを見ると、近年では起こっていないと書かれている日本人旅行者の睡眠薬強盗被害事件が、筆者が在勤していた当時は毎月のようにあった。狙われるのは若いバックパッカーたちだ。被害者たちの話を聞くと、大方は次のようになる。旅行者がソフィアに着いて市内を散策していると、「どこから来たのか。町を案内しようか」と言葉巧みに言い寄ってくる輩がいる。賊は飲み物やクッキーを旅行者に勧める。旅行者がためらっていると、賊自ら食して安心させ、これを見た旅行者が口にすると、意識が混濁して、後のことは覚えていない。その手口は巧妙で、未開封のクッキーの袋を旅行者の目の前で開けて、一枚目を賊自らが食べてみせるが、睡眠薬は二枚目以降に仕込まれているのである。このように、賊に心を許した旅行者たちが



写真1 在留邦人らに見送られナイジェリアを去る筆者夫妻(1995年)

餌食になっていた。こうして意識を失った旅行者は金品を剥ぎ取られ、路上に放置される。通りかかった親切なブルガリア人が救急車を呼び、旅行者を病院へ運ぶ。パスポートが残っていて日本人と判明すれば、病院から日本大使館へ通報される。このようなことが頻繁に起こっていた。冒頭の領事の言葉は、「また日本人旅行者の睡眠薬強盗被害者が出ましたよ」という意味なのである。通報を受けた日本大使館では、筆者と領事、ブルガリア語通訳ができる職員の3名体制で緊急出動する。患者の収容先は、ソフィア最大の救急医療機関である国立ピロゴフ救急病院（写真2）だ。病院名の“ピロゴフ”とは、クリミア戦争（1853-1856）に軍医として従軍したロシア人外科医で解剖学者でもあるニコライ・ピロゴフ（1810-1881）にちなんでつけられた名称である。クリミア戦争では、ロシア帝国軍とともにブルガリア義勇兵も参戦したのである。

病院では筆者が中毒科の担当医とともに、ベッドサイドで患者を診察し、全身状態を把握する。領事面会に支障がないと判断されたら、領事が患者に人定事項や事件の経緯について質問する。会話に辻褃が合えば、患者の意識状態は清明と判断し、ひとまず安心する。再度担当医に病状と今後の見込みを尋ね、明日また来るからと言って病院を後にする。ところが、である。翌日病院に行き患者を再訪しても、患者は前日にわれわれと会ったことを全く覚えていない。初めての症例を経験した時は驚いたが、何例も経験すると、型の通りのごとく、患者は初回の面談を一切覚えていない。それほど強烈な睡眠薬攻撃

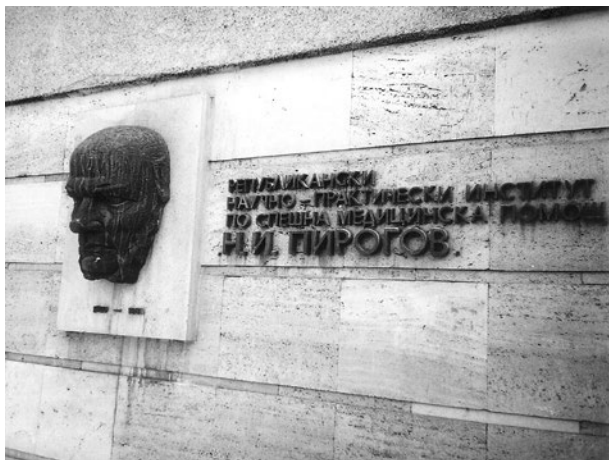


写真2 ピロゴフ救急病院  
入口に掲げられたニコライ・ピロゴフの像

を受けた訳である。幸い筆者の在任中には死に至るような重篤な症例はなく、患者は数日で退院し、旅券や金銭が残っていれば、旅を続けると言ってソフィアを去って行った。筆者ら大使館員は、このような旅行者の世話に奔走する日々が続いたのである。薬物といえば、薬物乱用の問題がある。これから本稿の表題“毒を以て毒を制す”の話をしたい。当時ブルガリアでは、周辺の東欧諸国やロシアと同様に薬物乱用が重大な社会問題になっていた。いや東欧だけではない。当時英国を訪れたとき、郊外のガソリンスタンドでトイレを借りて中に入ったら、真っ青な照明がついていたのには驚いた。後から調べてみたら、トイレで薬物を静注できないように、皮下の血管が透見できないような色調の照明にしているらしい。

さて、ブルガリアに話を戻そう。ある日、筆者は大使館の書記官とともに、保健省の薬物中毒外来を訪問した。ソフィアの住宅街にひっそりと隠れるように設置されたその施設では、薬物中毒患者の更生のために、メタドン代替療法を行っていた。メタドンの詳細については割愛するが、ヘロインやモルヒネなどのアヘン系麻薬よりも血中半減期が長いことから、諸外国では麻薬からの代替療法に使われている。この施設には一人また一人と薬物中毒患者が訪れる。受付の小窓の向こうでは、係員が大瓶に入ったメタドン溶液を紙コップに取り分けて患者に手渡している（写真3）。このような光景を目にした。まさに“毒を以て毒を制す”治療法である。

本稿を書くに当たり、海外の精神科医療事情に詳



写真3 保健省薬物中毒外来にてメタドン溶液を取り分ける担当者

しい関西福祉大学の勝田吉彰教授にメタドン代替療法について聞いてみた。勝田教授はかつての外務医務官仲間で、医務官 OB の中では大学教授にまでなった出世頭である。勝田教授によると、「メタドン自体は日本で認可されているが、麻薬に指定されているので、諸外国のように外来で渡すのは、日本ではご法度である」とのこと。

それからもう一つ、ブルガリアの薬物中毒外来では、メタドン代替療法の他に、注射器や注射針の交換プログラムを行っていた。すなわち、薬物乱用を根絶するのは無理だ。であるならば、注射器の使い回しによる HIV や肝炎などの感染だけでも防ぎたい。このような論理で、薬物乱用者のところへ行き、

使い古しの器具を回収し、新品のディスポーザブルな注射器や注射針、薬物を溶解するための容器などを与えるというプログラムである。こちらも“毒を以て毒を制す”ということか。(つづく)

## 文 献

- 1) 吉田定信. ブルガリア共和国における疾病および医療の現況. モダンメディア. 1997; **43**(2): 54-61.
- 2) 吉田定信. 変革期を迎えたブルガリアの医療制度. 日本医事新報1998; **3874**: 117-119

本稿は個人の見解に基づくものです。